

労働時間におけるフレキシビリティをいかにして記述するか ベンジャミン・スナイダーのエスノグラフィーを中心に

How can sociology describe flexibility in working time?: With a focus on Benjamin Snyder's ethnography

松 永 伸太郎*

Shintaro MATSUNAGA

1. 問題設定

労働時間は、労働者生活の充実に直結するトピックであり、労働を対象とする社会科学にとって重要な問題であり続けている。しかし、就業形態を問わず個人の裁量が大きい労働時間のあり方が広まりつつあるなかで、複雑化していく労働時間をいかにして認識するかという問題が同時に浮上してきている。本稿では、こうした文脈のもとで労働時間を社会学の立場から把握するための方策について、既存研究のレビューを通して議論する。

労働時間は労働者にとってどのような意味をもつものか、あるいは労働時間をいかに短縮していくべきかといった問題は、かねてより労働研究が関心をもってきた問題である。とりわけ近年は、こうした問題はワークライフバランスの拡充の必要性とともに議論されることが多くなっているように思われる。労働者が自らの家族形成を行おうとする際に、長時間労働がその阻害要因になっている見立てがあるためである(久本, 2018)。これに加えて、副業・兼業やワーケーションなどに代表される働き方の多様化、テレワークや在宅勤務に代表される働く場所の多様化によって、企業による労働時間管理はさきわめて複雑化している。こうした現状にもかかわらず、とりわけ社会学における労働研究は、労働時間に関する認識を深化させる取り組みを体系的に行っていない。

そのなかで数少ない貴重な視点を提示しているものとして高見具広による議論がある。高見は、日本における労働時間問題への問題認識を歴史的に検討し、たしかに1980年代からの労働時間短縮政策が効果をもった一方で、現代において長時間労働問題がどこに

所在しているのかを見通すことが困難な状況となっていることを指摘している(高見, 2008)。高見によれば、労働時間の動向は国際的な文脈でも「労働時間分布の分散化」として定式化される。しかし近年はそうした労働時間の多様化が自律的・自発的に働く労働者像とともに語られており、そうした「多様化」「自律的・自発的な労働」といった言説に批判すべき点が見落とされているのではないかという問題提起を行っている。

高見の議論は、労働時間の問題を社会全体の認識として議論するという視点を取っている点で独自性をもつ。しかし労働研究において議論されてきた労働時間問題は、それを労働者がどう経験するかや、それをどのようにマネジメントしていくべきかといった、労働現場に即した議論であったことも事実である。

そこで本稿では、そうした労働現場における労働時間問題という視点は担保しつつ、フレキシブル化している働き方のもとで複雑化した労働時間についてどのような視点をもって扱うことができるのかについて、一つのエスノグラフィー研究を題材として議論することにした。

2. 先行研究

既存の労働研究のなかで、労働時間に関する社会科学的な視座を打ち立てることを試みているのが、石田・寺井編(2012)である。この著作においては、主に労使関係論の視点に立って、労働時間問題を「雇用のルール」に着目することによって明らかにするという方針が示されている。具体的には、雇用関係のルールには集団的に決定される部分と個別的に決定される部分があり、とりわけ日本の雇用関係においては個別

的に決定される部分が多いとしたうえで、「ルールの持つ集団的決定と個別的決定の機能の相互連関を正確に描写する」という視点を石田光男は提示する(石田, 2012, p. 5)。こうした視点に基づき、労働組合の活動や法規制などを検討し、労働時間がいかに決定されるのかを検討している。

このように理論的に一貫した姿勢で労働時間を記述する取り組みはきわめて重要である。しかし、労働時間のフレキシブル化に伴って、労働時間をいかに労働者が経験するかについては、より複雑な様相を呈しているようにも思われる。たとえば、ファミリーフレンドリー施策の充実した企業での仕事生活と家庭生活の両立についての経験を論じたホックシールドは、そうした家庭生活に配慮した企業であっても両立は容易ではなく、仕事に関するシフト、家庭生活に関するシフトなどが複雑化し精神的な負担を強いられることを議論している(Hochschild, 1997=2012)。こうした事例は、労働時間を含めて、人々がかかわり、自らマネジメントしなければならない時間的幅を伴った活動が、複雑に折り重なっていることにより生じるものである。こうした経験については、集団的決定にしる、個別的決定にしる、企業や労働組合において公式的に交わされるルールに立脚した記述にはなじまないように思われる。

こうした問題を考えるうえで、Uber EATSやDeliverooなどのプラットフォーム労働に従事するフリーランサーの事例は参考になる(Purcell and Brook, 2020)。こうした仕事では、労働者に配布されているアプリ上で配達指示が伝達されるため、あらかじめどの時間に労働が発生するかが予測しにくい。しかし、ある程度熟練をした配達人は、どの時間帯にどのレストランへの注文が多いかなどを把握して、あらかじめ店の前で待機しておくなどしてロスなく効率的な配達ができるようになるという。

こうした事例から示唆されるのは、公式的なルールによる記述が難しいような事例であっても、こうした個人が複雑な労働時間を組織するための方法を捉えることによって、労働時間を秩序だった形で記述できる可能性があるということである。上記のプラットフォーム労働の例でいけば、他にも注文が入る可能性が高い店舗も考えられるなかでなぜ特定のレストランでの待機を選択するのか、他の配達人との駆け引きをどのように行っているのか、私生活との両立をどのように行っているのかなどを調査していくことによって、労働

者個人として、あるいは配達人という職業としての労働時間の決定やその経験を明らかにしていく道筋が開ける可能性がある。

しかし、このように複雑化したなかでも労働時間が労働者自身の行為によって組織化されていることを示唆する事例は存在するものの、そうした実践を体系的に記述する取り組みは乏しいのが現状である。労使関係論が推奨するように雇用のルールに依拠した記述が難しいとしても、また別種の体系性をもった記述の方策を打ち立てていく必要がある。

以下では、こうした労働時間の記述枠組みを整理していくための有力なエスノグラフィー研究(Snyder, 2016)を詳細にレビューし、さらなる発展可能性について議論する。

3. 本稿の検討対象

本稿で取り上げるのは、ベンジャミン・スナイダーによる著書『見通しの立たない職場:柔軟な資本主義における時間と道徳秩序』である(Snyder, 2016)。この著作はアメリカにおける「柔軟な資本主義Flexible Capitalism」のもとで労働時間が個人化・柔軟化し、それと並行して就業形態についても多様化していくなかで、労働者の時間経験がいかなるものとなっているのかについて、金融専門職・トラック運転手・求職者の3つの対象に対するインタビュー調査や参与観察調査を行い、検討したものである。同書の目次は下記のようになっている。

- 第1章 見通しが立たない労働時間
- 第2章 労働時間についての小史
- 第3章 時空間の金融化
- 第4章 時空間の規制緩和
- 第5章 不安定な未来
- 第6章 フレキシブルな時間における道徳秩序
- 第7章 労働時間の細分化と維持困難な労働者生活

本稿に関連が深いのは第1章・第3～6章である。第1章は理論的視点の整理パートとなっている。第3～6章は分析パートであり、第3章で金融専門職、第4章でトラック運転手、第5章で求職者の時間経験がそれぞれ分析される。第6章ではそれぞれの対象者がもつ道徳秩序についてそれぞれの事例に横断的に言及しつつ分析がなされる。次節以降、同書の内容を詳細に検討する、4節では第1章を中心に、5節ではそれ

ぞれの事例の該当章(3～5章のいずれか+6章)を中心に検討する。なお、4・5節で同書を直接引用する場合、ページ数のみ表記する。6節では、スナイダーの貢献とさらなる発展可能性を議論する。

4. 時間展望と時間地図の組み合わせとしての労働時間

スナイダーの議論は時計時間に議論を限定せず、それも含めた時間編成の変化を労働者の経験という観点で捉える構成を取っている。同書の冒頭で労働時間の主観的経験としての時間性temporalityに焦点を当てると明確に述べている(10)。柔軟化した労働時間を社会的に捉えるうえで有力な視座を示している。

スナイダーによれば、柔軟な資本主義において起きている労働者の時間経験の変化は、「社会的時間」(3)の変化を労働者がいかにして経験するかについて大きな変容をもたらしているという。この社会的時間は「人間が社会制度のもとで行う相互作用を通して生み出すリズムや軌道のシステム」(11)を意味する。労働時間は、この社会的時間の一つであるという。この社会的時間が再構成されることは労働者の道徳生活にも重要な影響を与えるとスナイダーは述べる。

社会的時間は「自然的時間」と同一のものではない(11)。自然的時間は、季節のサイクルや恒星の進化段階などを含む時間である。自然的時間が持つプロセスは社会生活に本質的な影響を与えるという関係にある。スナイダーはこうした区別を置きつつ社会的時間それ自体も三つの構成要素からなっていると整理する。その要素とは、リズム・時間展望timescape・時間地図time mapである。

4-1. リズム

リズムは、社会学理論のなかで数多く主題化されることはなかったが¹⁾、時間経験や協働についての考察するにあたって重要な時間の要素である。まずスナイダーはリズムを「変化と活力の出会いの場」として捉える。これは、社会的行為者が時間的流れのなかで次の行為や出来事について予測をしたり、選択をしたり、企画をしたりする際には常に次の起こりうる変化を見通しながらこれらの行為を行うのが通例であり、かつこうした行為には精神的・身体的な活力を消費することを伴う。こうした変化や活力の交差があるからこそ、人びとは時間に対して多様な経験をするのである。こうした環境変化を知覚するなかで行われる予測・選択・企画

に関するリズムは、「時間経験の最も基礎的な構成要素」(12)である。

それに加えて、リズムは他者との協働において生じるものでもある。予想・選択・企画といった行為は個人としてだけではなく、集団として行われることもある。それに加えて、そうした行為は他者の期待に同期する形で行うこともある。現代社会に見られる標準化された時間管理はこのようにリズムを同期させる必要性から生じてくるものである。

このようにリズムを予測・選択・企画といった行為や他者との同期という観点で捉えることによって、労働時間についても捉え方を変えることができる。労働は、仕事上のタスクに時間を割り当てるということを意味するのではなく、労働現場において他者とともに活力を用いるリズムを同期させることを意味するのである。この視点は必然的に、時間性を作り出すのは単に時計時間を割り当てる個人ではなく、共に時間を経験する集団が取り込まれている制度的・状況的文脈であるという理解を導くことになる。労働時間に対する研究関心は単に労働者がどのように時間を使っているかという点ではなく、労働者集団が協働するために取り組んでいる「リズムの布置関係」(13)に向けられるようになるのである。

4-2. 時間展望

時間展望は、「相互作用の場において行為者が作り出すリズムの布置関係」を意味する概念である。スナイダーはこの考え方を社会学理論において時間論を幅広く展開しているバーバラ・アダム²⁾の議論²⁾から持ち出している(Adam, 1990=1997) (Adam, 2005)。スナイダーはこの概念においてとくに体系的な整備を行うことを試みている。

時間展望において問題となるのは、複数のリズム同士の関係性である。たとえば親が子どもに対して毎朝仕事に行く前に本を読み聞かせる約束をしていたとする。これはその親の生活を組織する一つのリズムとなる。しかしこのリズムは、朝食を用意するなどの家事労働におけるリズムであったり、仕事の締切などの他のリズムとの調整が不可欠なものである。このように複数のリズムが織りなす多様な関係性が、時間展望という概念の焦点である。

スナイダーによれば、時間展望は一般に可変的であるが、労働に関する時間展望にはある程度定まったものも多いという。こうした見立てのもと、スナイダー

は労働に関する時間展望に四類型の理念型を示している。その四類型とは、①統一unification、②同期synchronization、③脱同期desynchronization、④危機crisisである³⁾。

統一は、「完全な同期と没入に特徴づけられる時間展望」(14)である。この状態は、複数のリズムが本質的に単一の統一されたリズムを形成しているような状態である。労働の文脈では、仕事に関するすべての作業がびったりとうまくはまった瞬間であったりとか、チームでの共同作業において画期的なアイデアを生み出すような一体性を実現した瞬間などを指すという。

同期は、「複数のリズムが機能的に同期しているが、完璧な同一化はしていない」(15)状態を意味する。うまく機能している職場は常にこの同期の状態にあるという。具体的には、作成されたスケジュールを職場のメンバーがある程度守っており、計画されたプロジェクトが大きな失敗はなく完遂されているというような状態を指す。このように同期は「通常時の経験」を意味するような時間展望である。

脱同期は、「リズムが衝突している」(15)状態を意味する。マルチタスクの状況が積み重なってしまっている状態などがこの脱同期に該当する。他には、タスクの進行が他のタスクの進行によって中断されてしまったり、計画が予期しない事態によって遅れてしまったりする事態も含むという。脱同期の状態でも目標が完遂されることはあるが、その場合は進行中にどのように目標が完遂できるかを見通すは難しいという。

危機は、「リズムが完全に分裂し、阻害されている」(15)状態を意味する。危機は統一とは真逆の関係にある。この状態においては、少なくとも現時点でのやり方ではもはや物事を進行させることができない。たとえば、新商品と発売してすぐに設計ミスが発覚したり、従業員の怪我や事故死を招くような事態が発生したり、経済破綻によってもはや従業員の雇用を維持できないといったような場合がこの危機に該当する。このような場合、雇用者や労働者は一から計画を立て直すような作業を求められることになる。

このように時間展望という考えから四類型を提出し、個別の事例の分析に適用する枠組みを整理していることにスナイダーの特長がある。

4-3. 時間地図

時間地図は、「時間の社会学」についての議論を1970年代から継続的に行っているエヴィアター・

ゼルバヴェルの議論に示唆を得た概念である(Zerubavel, 2012)。「時間展望はリズムによって作り上げられるが、時間展望自体も過去への想起と未来への期待を形づくる広範な時間的構造に埋め込まれている」(16)。ここでいう広範な時間的構造が時間地図である。

ゼルバヴェルは、この時間地図の議論を過去への想起についての多様なナラティブを検討するために行っている。過去についての語りは、たとえば進歩的に語られたり、逆に衰退として語られたりすることもある。生物の進化は、同じ霊長類のなかから類人猿やヒトが系統的に進化していったように「系統樹」のような形で語られる。毎週日曜日を迎えることは循環的に語られるが、同じ日のなかでの時間の進行は線形的に語られる。この他にも、過去の語り方には多様な「プロットライン」(Zerubavel, 2012, p. 11)が存在する。ゼルバヴェルは、こうした時間の語りをめぐるさまざまな形式を地図になぞらえ、時間地図として概念化している。

スナイダーはこうした議論を未来への期待についても適用していると思われる。たとえば企業における昇進は上昇的で、階段を上るような軌道として語られる。現代社会において、労働現場は時間地図を伝播させる最も主要な場であるとスナイダーは指摘する。たとえば、キャリア・昇進・年金・給与等級・採用・解雇のようなものは人びとが回顧したり将来を展望したりする際の能力を与えるものであり、ライフコース全体について語るができるような一つの方法である。このようにスナイダーは労働と時間地図の関係を密接なものとして理解している。

こうした概念の整理のもと、スナイダーは時間性に基づくアプローチにおいては、労働時間は以下のように捉えられ、分析されると述べている。

「労働時間は時計時間ではなく(あるいは、時計時間であるだけでなく)、特定の労働現場における時間展望と時間地図からなる構成物である。労働をめぐる時間展望と時間地図は、社会的時間についてのテクニカルな方向性の両方において、労働者の経験に影響を与える(もちろん、それらが完全に決定するというわけではない)。こうした観点で、フレキシブル・エコノミーにおける労働時間を分析することは人びとが時間を「費やす」仕方がいかに変わったのかを見ることは異なる。重要なのは、時間展望と時間地図が人びとの主観的経験をいかに形づくっているのかを捉えるため

に、多様な職場にそれぞれの形で導入されてきた新しい時間展望と時間地図を見ることなのである」(17)

こうした枠組みのもと、スナイダーは3つの対象に關する時間経験を考察しようとする。次節でそれぞれについての知見の概要を整理する。

5. 柔軟な資本主義における時間経験

本節ではスナイダーが自らのフィールドワークに基づいて分析を行った3つの事例についての知見を紹介する。スナイダーは前節で整理した概念を用いながら、柔軟な資本主義における時間経験のあり方を析出しようとしている。金融専門職・トラック運転手・求職者という組み合わせは、その仕事の内実こそ大きく異なるが、どれも時間的な見通しを持ちにくく、そのなかで当事者達が個人的な対処を行っていることが共通する。こうした共通性から、スナイダーは3つの事例を柔軟な資本主義の特徴の諸側面を析出するためにそれぞれ重要な対象として扱っている。

5-1. 金融専門職

金融における時間展望は、その仕事における成功がきわめて限定された機会から生じるという前提のもとで形成されている。金融取引は高度にデジタル化されたグローバルなやりとりであり、切迫した時間のなかでなされ、金融専門職はそのごく限られた時間のなかで取引を成功させたり、的確な分析を行う必要がある。金融商品の取引にかかわるアナリストやトレーダーは、その時間経験自体も取引のあり方に強く影響を受けており、トレーダーたちが経験する時間展望は、「取引時間deal time」として経験される。自身が自らの時間展望を表現するにあたって時計時間とは異なる表現を用いていた。たとえばあるトレーダーは自らの時間の流れを「フロー」(60)と表現し、これは顧客との取引や会議などによって時間がきわめて圧縮されている状態を示していた。取引を求める顧客への迅速な対応が肝要であり、そのためには通常の労働者にとっては普通とは考えられないような時間性のなかで仕事を遂行する必要があった。こうした状況にあることによって、取引がもたらす時間展望が4つの状態のどれにあたるかは、ニーズをもった顧客との取引をどれだけタイムリーに遂行することができるかによって変化するという。

一方、アナリストが経験する時間展望は、「市場時間market time」(63)である。これは特定の市場がも

たらすサイクルによって作り上げられる時間展望である。市場時間は、取引時間とは異なり、特定の市場のサイクルによって作り上げられる時間展望である。年単位では、市場は月によって繁忙期とそうではない時期がある。一日単位でも、市場が開場している時間をベースとしたサイクルが存在する。しかしその一方で、アナリストは分析対象となる各国の市場が開場している時間に厳格に準拠して仕事をこなさなければならないという制約を抱えている。

トレーダーとアナリストの時間展望は、このようにそれぞれ独特な特徴を有する。しかし、スナイダーはいずれにしても取引や分析の要求に対して「常に対応可能で、緊急性を感じていること」(171)を求められているという点に金融専門職の特徴があることを強調している。その証拠として、金融専門職は自らを軍隊や救急医療従事者に例えることが頻繁にあるという。

金融専門職はオフィスという空間のなかで仕事をするが、その取引は全世界的に広がっているものであり、かつそこで取引される金額が何百万ドルといった巨額の金融商品である。経験の浅いトレーダーやアナリストは、こうした取引を現実的なものとして感じられないことがあるという。少額の取引であっても巨額の取引であっても、PCのスクリーン上に映る取引のプロセスには大差がなく現実味を感じにくい。しかし、経験を積んだ専門職になると、取引は現実の金銭を取り扱っているものとして経験することができるようになり、かつ巨額の取引が伴うリスクについても、むしろそのリスクを負っているスリル自体を楽しむような仕事を行うことができるという。

さらにスナイダーは金融専門職の時間地図のあり方についても言及している。金融専門職が行う取引の成否は常に不確実性に晒されているため、その成否を確実に見通すことはできない。このことを背景に、専門職同士の競争が非常に激しい状態になっており、そのなかで生き残るためには絶えず安心感を持たずに目の前の仕事に没頭することが求められるという。この状態は当然ながら金融専門職達に身体的・心理的な負担をかけることになる。金融専門職は、目の前の仕事に身体的・精神的にエネルギーを費やすことが明日の価値になるという仕方では時間地図を持ち、それによって自らの努力と報酬を結びつけていることを指摘する。しかし、こうした結びつけが実際にできているかどうかは、専門職の経験によっても異なってくるという。

5-2. トラック運転手の事例

スナイダーが次に取り上げるのは、長距離輸送を行うトラック運転手達の時間経験である。トラック運転手も金融専門職と同様に柔軟な資本主義の影響を受けてきた職業である。とくに、規制緩和による雇用形態の不安定化や、ウォルマートやアマゾンといった迅速な輸送を重要視する企業の台頭のもとで、労働時間のフレキシブル化を経験せざるを得ない職業であった。

トラック輸送産業は、産業構造の変化のもとで、「リース購入」(94) 契約と呼ばれる労働契約によってトラック運転手を活用するようになったという。旧式のトラックを分割払いで貸し与えることによって、運転手に稼ぐ機会を与えるのである。こうした労働編成における報酬体系は「マイル単位の出来高賃金」(95) である。こうした賃金体系の結果として、運転手は素早く目的地に到着するように努力することになる。しかし、トラック運転手には安全性を担保するための労働時間や休憩時間に関する産業レベルの規制が定められている。運転時間の上限は1日14時間、11時間運転したあとは10時間の休憩が必要、運転時間以外の時間のうち1日8時間はトラック内の寝台で横になっている必要がある、などの規則である。運転手は、これらの遵守を遠隔で管理されており、こうした規制のもとでどのように効率的な輸送を行うかが運転手の課題となる。

こうした規制は、運転手達にとってはトラックを走らせたいために休憩を取らなければいけなかったり、休憩が必要なのに輸送をしなければならないといったリズムのミスマッチを生じさせる。これへの対策として運転手達に必要とされるのは、「同調entrainment」(115) である。これは、時計時間をベースとした労働時間規制と、柔軟に編成しなければならない輸送時間という、二つの非同期的なリズムを、徐々に同期させていくことを示す。労働時間規制や発送業者とのアポイントメントや届け先などにかかわる時計時間を同期させるために、複雑なリズムのパッチワークをトラック運転手は行っていくことになるのである。

たとえばトラック運転手は、荷物の積み込み等で待機を強いられているときに、睡眠を取っている時間としてその時間を記録しておき、その時間を実際には起きていることによって待機が終わり次第すぐに輸送に向かえるようにしていた。逆に、まだ輸送に使える時間が数時間残っているにもかかわらず、自らの疲労に応じて自主的に休憩を取ることも行っていた。こうした仕方

で、トラック運転手はいわば自らの身体感覚を用心深くモニタリングしながら、効率的に輸送を行うためのリズムと、運転時間に関する規制のリズムを同調させるのである。スナイダーはこうしたスキルを「リズムの専門性」(107) と呼ぶ。それは「運転手の身体が持つ、注意・疲労・用心深さに関する能力についての専門的知識」(107) である。リズムの専門性に関する運転手の経験が最もよく現れるのは睡眠についてであり、熟練した運転手は自らの身体が遂行できる睡眠時間と運転時間の関係について、睡眠時間の長さだけではなく、睡眠時間帯との関連でもより正確に理解することができているのだという。

こうした仕方、トラック運転手は時間展望の観点では輸送のための時間と労働時間規制の非同期に当初晒されるが、熟練を積みにつれて同期から統一の状態へと変化させていくことができる。自らの身体を媒介して運転や休息の適切なタイミングを測るのが時間展望の観点からのトラック運転手の特徴である。

5-3. 求職者の事例

スナイダーが第三の事例として取り上げるのは企業から解雇されたり、自ら転職することを決断し失業した状態にある求職者である。アメリカの大企業でも、事業環境の変化に対応した形での従業員の雇用を行うために、従業員の解雇を行ったり、有期契約者へのアウトソースを行うことが進められてきた。必ずしも望まない形でその対象となった求職者達の時間経験とはいかなるものかについてスナイダーは検討している。

スナイダーは、20~60歳代の幅広い世代のホワイトカラー求職者にインタビュー調査を行うことを通して、求職者達の時間経験に迫っている。その際、求職者達がどのようにして将来的な展望を持ち直すことができるのかについて、その将来展望の見通しの長さのタイプに着目して分析枠組みを準備している。こうした見通しを総じてスナイダーは「投射性projectivity」と呼ぶ。投射性は、社会学者アン・ミッシュによる概念で、期待の構築を指向した社会的行為の次元を意味する(Mische, 2009)。

スナイダーは投射性を短期的・中期的・長期的の三次元で整理している。この三次元は柔軟な資本主義における時間地図を検討するために重要な一つの観点であるという。短期的な投射性は、その都度の直近の未来か、その日ごとの未来までしか及ばない投射性である。これには行為者の身体的動作がどのような行為の方向性を示唆しているのかなどの、行為者が自明と

見なしている相互行為の技法なども含まれる。中期的な投射性は、比較的行為者の意識の俎上にもあがるような、行為者のナラティブやプロジェクトなどが含まれる。こうした投射性は、その進行中に行為者が反省的に再構成することも多くあるという。長期的な投射性は、前節でも論じたゼルバヴェルが論じる意味での時間地図と同等のものであるという。この水準では、行為者は必ずしも自らが依拠している投射性を自覚していないが、その時間地図の存在によって他者と共有された未来をイメージしたり話題にしたりすることができる。

この枠組みのもとで、スナイダーは求職者の時間経験が移り変わっていくプロセスを描いている。当初、企業という境界に規定されたキャリアという時間地図を有していた。スナイダーが調査した求職者達の多くは、企業内での昇進を展望しており、その展望があるなかで失職する状況になった。こうした時間地図は、失業経験の前から当事者にとって意識されているわけではない。失業という経験がその時間地図に突然の中断をもたらすことによって、意識の前面に現れてくることになる。この中断の期間においては、求職者達は時間展望の観点では「危機」の状態にある。失業によって、求職者は突然にいかなるリズムも失うことになる。もはやスケジュールも、め切も、ルーティンもないのである。こうした「危機」の時間展望の状態にあるとき、労働者は罪悪感を覚えたり、恥や不安を感じるという。このようななかで求職者が次の職を得るための活動を始めるが、すぐに長期的な投射性を獲得することができない。

このように求職者にとっての苦境が続くが、数ヶ月の活動を経て、求職者は「危機」の時間展望から脱するようになる。この変化は、孤独に求職活動を行っているところから、他者との相互作用を通して前向きな姿勢を獲得していくことを通して生じるという。たとえば、公共図書館に通うようになったり、仕事に行った配偶者の帰りを待つ間に掃除をしたり、ジムや公園でエクササイズをしたり、地域組織でボランティア活動をするなど、求職活動と並行して新しい活動にかかわる対象者が数多くいたことをスナイダーは報告している。このように改めて活力を得た求職者において顕著なのが、改めて「同期」の状態の時間展望を獲得し直すということである。こうした活動にかかわりつつ、求職者は改めて朝から夕方まで、スケジュールの定まった活動を行うことができるようになり、そのなかで求職活動のための履歴書を作成したりすることもできるようになる。

この段階に至った求職者は、直近の未来に限られた投射性から、さらに長期的な投射性を得る見込みを持てるようになるという。この背景には求職者達の時間展望が「同期」の状態に変化することによって活力が湧くという側面があるが、重要な役割を果たす場として求職者支援機関があるとスナイダーは指摘する。こうした支援機関において求職者達は実際に自らの失職を経験した講師などによるセミナーなどを受けるが、そこで求職者達に新しい時間地図の形が提示される。それは、労働者個々人が自分自身の人生の軌跡を作り上げるオーガナイザーであり、監督者であるという見方である。このように支援機関において講師達は「成功する求職者に不可欠な特徴は、ポジティブで、活力に満ちており、前向きな心理学的指向を有することである」(157)という見方を断固として主張する。これは組織内のキャリアを当初指向していた求職者の時間地図とは異なった見方である。こうした求職者達は、自分自身を柔軟な資本主義の犠牲者としてではなく、そのなかで新しい未来を作る企業家として自己呈示するようになる。柔軟な資本主義がもたらす不安定性をむしろチャンスとして認識するような時間地図を求職者は新たに構築していくのである。

5-4. 柔軟な資本主義における時間展望と時間地図

以上でスナイダーがそれぞれの対象に対して明らかにしている内容を整理したが、全体としての知見についても本稿に関わる範囲で議論しておく必要がある。柔軟な資本主義がもたらす時間経験という観点でどの事例にも共通することとして、当事者がそれぞれに対処するための個人的な「ゲーム」(Burawoy, 1979)を組み立てているという点がある。金融専門職は自らを軍隊や救急医療者に例えて必要があれば常に緊急として取引や分析を行うという姿勢を有することによって、その対応がうまくいっている限りにおいて、見通しが立たないという感覚を満足すべきものとして見なしていた。トラック運転手については、「リズムの専門性」や「同調」の議論にあったように、労働時間規制と効率的な輸送を両立させるような労働時間の組み立てが熟練と深く関わっている。求職者については、時間地図を再構成し、自らを不安定な労働市場の犠牲者ではなく「企業家」として精力的な求職活動を行うようになることが明らかにされていた。

スナイダーは第7章でこうした事例について時間展望と時間地図の観点から総合的に考察している

(201)。時間地図の観点では、不安定性を批判するのではなく、むしろ自分自身を見つめ直し再構成することができる、予期せぬチャンスとして扱うという見方が生じている。時間展望の観点では、労働時間が断片化されていることが、労働者のレジリエンスを称揚することにつながっている。つまり、労働強度の高まりに対処するにあたって、それは個人的な責任においてなされるものであるという理解の仕方が広がっているというのである。

このようにスナイダーは、それぞれの事例の分析から、柔軟な資本主義がもたらす新たな熟練の形式を析出することだけではなく、それが時間地図や時間展望との関連で労働者が認識する「よい仕事」「よい働き方」に関する道徳的な理解の仕方にも影響を及ぼしていることを指摘している。一般にフレキシビリティに関する議論は、その不平等性や不安定性に議論が集中することが多いが、こうした労働者意識のあり方への影響を見いだしたことをスナイダーは自らの学術的貢献の一つとして位置づけている。

6. スナイダーの労働時間論の発展可能性

以上でスナイダーによるエスノグラフィックな分析を詳細に紹介した。本節では、労働時間におけるフレキシビリティを捉えるうえでのスナイダーの意義と、今後の発展可能性について議論する。

スナイダーによる時間展望と時間地図という枠組みを利用した労働時間の分析は、時計時間を前提としない視点を示している点で、労働時間に関する社会学的研究のなかで独創的な位置を占めている。とりわけ重要なのが、分析単位としてリズムを基礎としていることである。スナイダーがリズム分析において依拠するルフェーブは、リズムの基礎はそれがかわる活動に繰り返しが存在することであると指摘している(Lefebvre, 2017)。つまり、リズムを分析単位として指定したことによって、労働という活動をたとえば報酬を得るための経済的活動とは異なり、社会成員の多くが日々繰り返しかえし行う活動の一つとして扱うという、社会学独特の視点を示していることになる。とくに時間展望の議論で顕著であったように、労働時間も単線的に積み上がっていくような形で捉えられるのではなく、日々の繰り返しかえしがもつテンポや間隔などとして捉えられることになるのである。

このような視点の転換は、同様に日々繰り返しかえす社会的活動と労働を機能的等価物として扱うことを可

能にする。労働以外のそうした活動としてはたとえば家庭におけるケアなどがあるだろう。スナイダー自身、金融専門職がもつかなる仕事も緊急のものとして対応するという視点が、家庭でのケア責任と衝突し、道徳的なジレンマをもたらすことを指摘していた。こうした現象は、単なる事実発見の水準としては目新しいものではなく、むしろワークライフバランスの議論では再三指摘されてきた問題である。しかし、これらが異なるリズムを持つ活動同士の関係性という観点から議論されることによって、より詳細に立ち入った分析が可能になる。この場合、労働現場と家庭で費やす時間を単に時計時間の観点で捉えるのではなく、それぞれの活動がどのようなリズムによって構成されているのか、そうした多様なリズム同士がどのような関係にあるのかなどが分析の視野に入り、文字通りワークとライフの「バランス」のみに焦点を当てるよりも時間経験の複雑性を捉えることが可能になるはずである。こうした場合をはじめとして、リズムに焦点を当てる分析は、労働それ自体の時間秩序を捉えるうえでも、労働とそれ以外の社会的活動の関係性を捉えるうえでも有効性を持つ。

こうした観点において、スナイダーの議論にもさらなる発展性があるように思われる。スナイダーは時間展望を統一・同期・非同期・危機の四分類で分析を行っていたが、これらは概念上、二つのリズムの関係性に分析の焦点を絞ったものとなっている。時間展望とリズム概念を組み合わせたことはスナイダーの理論的独創性であるが、労働にかかわるリズムはきわめて多元的なものであり、二つのリズムの関係性という点に議論を拙速に絞らない方が、発展性を秘めた視点になると思われる。

その発展性を議論するにあたって、スナイダーがどの事例においても事実上労働者の熟練を分析対象としていたと理解できることが重要である。スナイダーはいずれの事例でも、その職種において経験の深い者がどのような活動を行っており、自らの時間経験をどのように理解しているかに着目していた。つまり、スナイダーのリズム分析は、二つのリズムの関係性を分析者として抽象的に分析していたのではなく、常に労働者自身の行為や理解の資源として分析する視点をもっていたと理解することができる。複数のリズムの関係性を組織するのは労働者自身による行為なのである。

こうした労働者の行為に着目することがなぜ重要なのかというと、2節で述べたような、雇用のルールに着目するのは別種の観点での体系的な記述の方針を

見いだす点にかかわるためである。社会学における「相互行為主義アプローチ」(Gibson and vom Lehn, 2018)では、社会的行為は無造作に行われるものではなく、その都度の状況に即した形で秩序だった形でなされると考える。たとえば職場における呼び出しや声かけなどですら、その都度の状況に対して合理的な形で行われることが、労働者の行為の詳細な分析から明らかにされている (Tuncer and Licoppe, 2018)。労働者の行為の分析には雇用のルールとはまた異なる視点の体系性が析出される可能性がある。

とりわけ、労働時間の議論においてはこうした行為の水準の議論が重要になってくるように思われる。先行研究や、スナイダーの研究が何度も示しているように、職場における労働時間管理のあり方は急速に個人化をし続けている。こうしたなかでは、たとえばコアタイムが設定されたフレックスタイム制度のもとで少し遅れて出勤するときのように、労働時間をめぐる制度の枠内で勤務をするのであっても、そうした遅れて出勤することの決定自体は個人的な決定として現象せざるを得ない⁴⁾。さらに、より重要な点として、そもそも時間の社会的編成は、人々が他者と協働する必要性とともに展開する。たとえばタイムテーブルやスケジュールといった時間編成は、他者が同じ時間に定められた行為を遂行しなければ組織的な企てが達成できないからこそ、必要となる (Zerubavel, 1976)。そして、労働現場は言うまでもなくそうした他者との協働が至るところに存在する場である。したがって、労働時間におけるフレキシビリティの内実を捉えるにあたっては、まずもって労働者自身がそうしたフレキシビリティを組織するような行為に分析の焦点を当て、まさにそうした行為との関連で複数のリズムがもつ関係性を議論することが有効になってくるのである。

7. 結論

本稿では、労働時間におけるフレキシビリティの増大に対していかなる記述が可能かという問題意識に基づきつつ、顕著に独自性のある視点を提示しているベンジャミン・スナイダーのエスノグラフィーを詳細に検討した。その結果、時間展望と時間地図という分析概念を用いて柔軟な資本主義の影響下にある3つの職種の時間経験をスナイダーが明らかにしていることや、とくにリズムという分析視角によって労働を「繰り返し行われる社会的活動」という観点から捉える点に意義があることを指摘した。加えて、さらなる発展可能

性としてリズムの組織を労働者の行為の水準で分析することにより、先行研究とは別様の体系的な記述につながる可能性があることを示唆した。

最後に、ここまで本稿が提示した視点に基づいて実際の分析を行う際にとくに有効な対象となることが期待できるものについて二点述べたい。

第一に、個々人が担う仕事を構成する課業(タスク)に関する分析である。課業は、個々の労働者が遂行すべき責任を負っている仕事を項目的に細分化していったときの最小単位といえるが、この課業を起点にして労働をめぐる複数のリズムの関係性を捉えることができると思われる。課業自体がどのような行為によって組織されているのか、課業同士のリズムはどのような関係であり、その労働者の業務全体を構成しているのかなどを捉えることによって、その職業や組織における時間性的特徴が明らかになるように思われる。

第二に、スナイダーが議論していたところの中期的・長期的な投射性について、労働者の行為の観点から分析を行うことである。しかし、リズムとして労働を捉えたとき、中長期的な投射性も、短期的な活動の繰り返しと切り離されては存在しないはずである。どのような労働者であっても将来的なキャリアや私生活のあり方については、過去からの流れや現在の状況を資源として構想せざるを得ない。中長期的な投射性の獲得と日々のリズムがどのように結びつくのかを、労働者が労働現場や私生活において組織するリズムの変化を捉えることで明らかにしていくことができると思われる。

これら二点の分析を進めていくことによって、フレキシブルな労働時間のなかでどのようにして労働者が将来的な投射性を獲得するのかという重要な問題にアプローチできるように思われる。これらの課題を解決するにあたっては個別の職業や組織を対象とした詳細なフィールドワークが必要になる。そうした経験的分析に関しては別稿を期することにしたい。

注

- 1) リズムを社会学理論の観点から考察した業績としてアンリ・ルフェーブルによる議論がある(Lefebvre 2017)。スナイダーのリズム論もルフェーブルの議論に多くを依拠している。
- 2) アダムの時間展望論は、人類学者のティム・インゴルドによる景観landscapeについての議論に依拠している (Ingold 1993)。インゴルドの強調点は景観を理解することがそれ自体のなかに内在する時間

性を捉えることもできるという点にあり、リズムと時間展望を関連させたのはスナイダー自身の理論的貢献である。

- 3) これらの区別について、スナイダーはLefebvre (2017)にある isorhythmia, eurhythmia, arrhythmia, fatal desynchronizationという区別に依拠しつつ、理解しやすくなるように言い換えたと述べている。
- 4) ただし、スナイダーの議論のなかには明らかに職業者としての熟練という視点も含まれていて、行為に焦点を当てる場合であっても、実際には集団的な水準が喪失されているわけではない。この点は労働時間の個人化における共同性の可能性を捉えるうえで重要であるが、スナイダーが依拠しているブラウォイの議論とともに検討する必要がある。この点は本稿の範囲を超えるので別稿にて行いたい。

謝辞

本稿は、令和2年度長野大学研究助成金(研究課題名:労働社会学における「時間」の多層性に関する理論的研究:「時間の社会学」の応用可能性に着目して)の助成を受けたものである。

References

- Adam, B. *Time and Social Theory*. Oxford: Polity, 1995.
(伊藤誓・磯山甚一訳『時間と社会理論』法政大学出版局、1997年)
- Adam, B. *Timescapes of Modernity. The Environment and Invisible Hazards*, Florence: Taylor and Francis, 2005.
- Burawoy, M. *Manufacturing consent. Changes in the labor process under monopoly capitalism*. Chicago, London: University of Chicago Press, 1979.
- Gibson, W. and vom Lehn, D. *Institutions, interaction and social theory*. London: Red Globe Press, 2018.
- Hochschild, A. *The Time Bind. When work becomes home and home becomes work*: Metropolitan Books, 1997. (坂口緑・中野聡子・両角道代訳『タイム・バインド:時間の板挟み状態:働く母親のワークライフバランス:仕事・家庭・子どもをめぐる真実』明石書店、2012年)
- Ingold, T. 'The Temporality of the Landscape', *World Archaeology* 25(2), 1993, pp.152-174.
- Lefebvre, H. *Rhythmanalysis. Space, time, and everyday life*. London, New York: Bloomsbury Academic, 2017.
- Mische, A. 'Projects and Possibilities: Researching Futures in Action', *Sociological Forum* 24(3), 2009, pp.694-704.
- Purcell, C. and Brook, P. 'At Least I'm My Own Boss! Explaining Consent, Coercion and Resistance in Platform Work', *Work, Employment and Society*: DOI: 095001702095266, 2020, pp.1-16.
- Snyder, B. H. *The disrupted workplace. Time and the moral order of flexible capitalism*. New York, NY, United States of America, Oxford: Oxford University Press, 2016.
- Tuncer, S. and Licoppe, C. 'Open door environments as interactional resources to initiate unscheduled encounters in office organizations', *Culture and Organization* 24(1), 2018, pp.11-30.
- Zerubavel, E. 'Timetables and Scheduling: On the Social Organization of Time', *Sociological Inquiry* 46(2), 1976, pp.87-94.
- Zerubavel, E. *Time Maps. Collective Memory and the Social Shape of the Past*. Chicago, Ill: University of Chicago Press, 2012.
- 久本憲夫新・正社員論:共稼ぎ正社員モデルの提言』中央経済社、2018年
- 高見具広。「労働時間「問題」とは何であったか:労働時間短縮政策を促した問題認識とその解消」『ソシオロジ』32号、2008年、235-249頁
- 石田光男。「本書の目的と方法」石田光男・寺井基博労働時間の決定:時間管理の実態分析』ミネルヴァ書房、2012年、1-17頁
- 石田光男・寺井基博編『労働時間の決定:時間管理の実態分析』ミネルヴァ書房、2012年